

③ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(26点)

私はいま、白い直方体の真新しい消しゴムを持っている。この消しゴムは、「白い」、「直方体である」、「新しい」といった特徴を持っている。これらの特徴のことを、哲学では専ら「性質」と呼ぶ。

この「性質」こそが「普遍者」とも呼ばれてきたものだ。例えば、「白さ」という性質は普遍者である。これに対して、これらの性質を担っている消しゴムのようなものを「個物」ないし「個別者」と言う。「白い」という性質が普遍者だと言われるのは、これが消しゴム以外の全ての白いものに、「普遍的に」当てはまるからである。砂糖も、塩も、※ホワイトハウスも、「白い」という性質を共有している。「直方体である」についても同様だ。この本も、豆腐も、あなたが小学一年生のときに通った教室も、全て「直方体である」という性質を共有している。①これに対して、個別者は一つしかない。白いものはたくさんあるのに対して、いま私が持っている白い消しゴムは一つしかない。ホワイトハウスも一つしかない。直方体であるものはたくさんあるが、あなたが小学一年生のときに通った教室は一つしかない。このような意味で、「白い」のような性質は普遍者(あるいは単に「普遍」)、特定の消しゴムのようなものは個別者(あるいは「個物」と呼ばれる)。

右のような仕方で普遍者と個別者を分けることは自然なことのように思える。しかしここから、西洋哲学史上最大の問題の一つが生まれてくる。それは、普遍者は本当に存在すると言えるのか、また、もし存在するとしたらどのような仕方で存在するのか、という問題だ。

私を持つ白い消しゴムは、明らかに存在する。しかし、この消しゴムを持つ白さ、すなわち②「白い」という性質が存在すると言えるかどうかについては、判断することは難しいかもしれない。私たちは白い消しゴムや白い家を見たことがある。しかし、「白さ」そ

のもの、「白い」という性質そのものを見たことがある人など一人もいない。私たちが見ているのは白い消しゴムであって、白さそのものではないのだ。

また、「白さ」が存在するとしたとき、それがどの場所にあるかもわからない。例えば私の消しゴムは私の家にあり、ホワイトハウスはアメリカのワシントンDCにある。私の家と、ホワイトハウスの両方に、そしてその他の白いものがある全ての場所に、同じ「白さ」が存在するのだろうか。このように考えると、「白い」という性質、普遍者が存在すると思えるのは、かなり具合の悪いことだと感じられてくる。

しかし、「白さ」が存在しないと考えると都合が悪くなる場面もある。例えば、私の消しゴムとホワイトハウスはどちらも「白い」という性質を共有していると考えられる。だからこそどちらも白いと言われる。ここで、「白い」という性質が存在しないとしたらどうなるだろうか。私の消しゴムとホワイトハウスが共通して持つものなど何もない、ということになるだろう。それではなぜ、何も共通するところのない私の消しゴムとホワイトハウスがどちらも「白い」と呼ばれることになるのだろうか。「私の消しゴムも、ホワイトハウスも、同じ白という色を持っている」という、当たり前前思われた事実が、説明不可能になってしまわないだろうか。

③ この問題を回避するには、「白さ」そのものが存在すると考えた方が都合がよい。「白さ」そのもの、すなわち「白い」という性質がもし存在するなら、「私の消しゴムとホワイトハウスはどちらも「白い」という性質を共有している」という文を、文字通りの事実として認めることができるようになる。

※ ヘーゲルも、「本当は何が存在するのか」や、「そもそも何かが存在するとはどういうことなのか」という存在論の問いを、哲学の最も重要な課題だと考えていた。ヘーゲルはこの問いに、「他のも

のと区別されているときである」という独特の答えを提示している。ヘーゲルは「そこにある」ものを考えるにあたって、そこにあるものが輪郭を持っているということを重視する。

再び消しゴムについて考えてみよう。机の上に載っている消しゴムには輪郭がある。輪郭によって、消しゴムは消しゴムでないものと区別される。消しゴムの輪郭は、消しゴムが載っている机と消しゴムを隔てる。また、消しゴムの周りの何もない空間と消しゴムを隔てる。こうして輪郭によって周囲のものや空間と区別されることで、消しゴムというものの在り方が定まる。そしてこれによって、消しゴムは現に、そこに存在することができている。

ここで重要なのは、何かが存在しているときには必ず、そのものは他のものと区別されている、ということである。現に存在するものは、輪郭を持つ。輪郭を持つということは、周囲と隔てられているということである。周囲と隔てられているということは、④ 何かが存在するという事態を捉えるためには、そのもの以外のものに目を向ける必要がある。それ以外の、他のものと区別されることで、そのものは存在している。

何かの在り方を定め、それによってそのものを存在させるような区別は、空間的なものばかりではない。空間的でない区別も、ものを存在させている。

例えば、消しゴムは鉛筆ではない。机でもない。修正液でもなければ、輪ゴムでもない。また、白い消しゴムは、黒い消しゴムではない。直方体の消しゴムは、丸い消しゴムではない。このように、それが何であるのか、そしてどのような特徴を持つのかということに関しても、存在するものは、他のものと区別されている。この区別がなければ、「白い直方体の消しゴム」が存在するとは言えないだろう。

ここで「白い直方体の消しゴム」の存在を可能にしている区別は、輪郭による空間的な区別ではない。そうではなくて、「消しゴム」や「鉛筆」、「修正液」、あるいは「白」や「黒」といった性質に関わる、概念的な区別である。概念的に区別されることで、「白い直方体の消しゴム」は存在する。

重要なのは、何かが存在するということと、そのものが他のものから概念的に区別されているということが、切り離せないということだ。前に見た輪郭による空間的な区別だけでなく、概念的な区別もまた、何かが存在するということを成立させている。

空間的な区別は、輪郭で区切ることによって、個物を存在させている。これに対して、概念的な区別は、輪郭を持たない普遍者をも存在させていると考えることができる。

例として、「白い」という性質を取り上げる。白という色は、黒や赤といった白以外の色から区別されている。このことによって、「白い」という性質は存在することができている。

色以外の性質についても考えよう。「直方体である」という性質は、「球である」「三角錐である」といった性質から区別されることによって存在している。

このように、多くの個物や普遍者について、存在するということは、他と区別されているということと不可分である。

(川瀬和也 著『ヘーゲル哲学に学ぶ
考え抜く力』による。一部省略がある。)

観からこのように呼ばれる。

(注) ※ホワイトハウス……アメリカ合衆国の大統領官邸。白色の外観からこのように呼ばれる。

※ヘーゲル……ドイツの哲学者。(一七七〇～一八三一)

問1 ①これに対して、個別者は一つしかない。とありますが、

その説明として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(4点)

ア 消しゴムが担っているさまざまな性質は、相互の組み合わせによって変化するため、完全に同じ性質は存在しないということ。

イ 消しゴムが持つさまざまな特徴を、特定の性質として認識するのは個人であり、人によって認識には差があるということ。

ウ ある特定の消しゴムのように、さまざまな性質を担っている個別の具体的なものは、一つしか存在しないということ。

エ 消しゴムなどの特定の個物が担うことのできる性質は一つしかないため、普遍的なものにはなることができないということ。

問2

②「白い」という性質が存在すると言えるかどうかについては、判断することは難しいかもしれない。とありますが、その理由として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(4点)

ア 私たちは白い消しゴムを見たことがあるが、そもそもその消しゴムが本当に存在すると言えるのかという問題について、明確な答えをもっていないから。

イ 私たちは「白い」という性質を持つ消しゴムを見たことがあるが、その消しゴムが本当に「白い」かどうかを客観的に判断する手段をもっていないから。

ウ 私たちが見ている消しゴムが「白い」という性質を持っているとしても、同じ性質のものは世界中に存在するため、すべてを比較することができないから。

エ 私たちは消しゴムのように「白い」という性質を持つものを見たことがあっても、消しゴムの持つ「白い」という性質自体を実際に見たことはないから。

問3

③この問題とありますが、この「問題」を説明した次の空欄にあてはまる内容を、存在、説明の二つの言葉を使って、三十字以上、四十字以内で書きなさい。ただし、二つの言葉を使う順

序は問いません。(7点)

「私の消しゴムも、ホワイトハウスも、同じ白という色を持っている」という、当たり前前に思われた事実が、

30
40

という問題。

問4

④ 何かが存在するという事態を捉えるためには、そのもの以外のものに目を向ける必要がある。とありますが、その理由として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。(4点)

ア そのものの在り方が定められることで、初めて輪郭を持つことが可能となるので、現に存在する同じ在り方をしている他のものを参考にして在り方を定める必要があるから。

イ そのものは単独では存在することができず、そのものの在り方が定まり存在できるようになるためには、そのものから隔てられ区別された他のものが必要不可欠であるから。

ウ そのものの輪郭の持ち方が、そのものが単独で存在できるかできないかを決めることになるので、他のものがどのような輪郭を持っているのか比較することが求められるから。

エ そのものは単独で存在することができると、他のものとのどのような関係で空間に存在しているかを見ないと、そのものが存在する場所を正しく認識することができないから。

問5 本文で述べられた「ものの存在の仕方」について、次のようにまとめました。空欄Ⅰ、Ⅱにあてはまる内容を、それぞれ十字以上、十五字以内で書きなさい。(7点)

個物は Ⅰ ことで存在するのに対し、普遍者は

Ⅱ ことで存在する。